

令和六年春彼岸法話  
任せることについて

正信寺 石川英和

令和六年三月二十日 正信寺 春彼岸 法話

## 任せることについて

石川英和

### 【はじめに】

本日もご多忙のところ、春のお彼岸法要にお参りいただきましてありがとうございます。今年は新年早々、能登で大地震がありました。亡くなられた方には謹んで哀悼の意を表します。また、能登地方の早期の復興を祈念しています。また、皆様の親戚や知人の方で被災された方がいらっしゃれば、お見舞い申し上げます。

今日は任せることについてお話しさせていただこうと思います。

### 【努力する美德はどこへ】

小さいころ、イソップ童話の「うさぎとかめ」を読みました。足の速いウサギと遅いカメが競争をして、最終的には、コツコツと歩を進めていたカメが頂上に先につくという内容でした。ある意味、子供の情操教育の一環として読むにふさわしいストーリーなのだと思います。

日本人は、コツコツ努力するのは、美德と考えていると思います。私が見るところ、ということはバブルの前の昭和ですが、成功した人の話を聞くと、「道が二つあって、厳しい方と易しい方があれば、厳しい方を選んだ人のほうが成功する」と聞かされてきました。

一方で、日本人はコツコツ努力ができる民族ではないかと思えます。阪神大震災でも、東日本大震災でも、筆舌に尽くしがたい災害が発生し、

住んでいる家や道路や水道やガスなどのインフラが破壊されました。しかしながら、完全には行きませんが、諦めずに復興を遂げる。こうした努力はできる民族なのだと思います。ですから、今回の能登の地震も大きな災害ではありますが、必ず復興すると信じています。

ところが、最近本屋の店頭を見ると、楽に痩せる本、株で簡単に一億円財産を作る本など、楽をして成功する方法を教える本にあふれています。テレビを見れば、時短で手軽でおいしい料理の番組がはやりです。

コツコツお金を貯めるとか、だしを取っておいしい料理を作るとかいうのは、どうも時流に合っていないようです。

果てには、文豪の名作で、誰でも知っている小説を短時間で読めるように、あらすじだけ要約した本まで出ています。文体や細かい表現を楽しむことは、もはや文学の楽しみではないようです。

日本人の美德はどこに行ったのだろうかと思うこともしばしばです。

### 【易行】

浄土真宗をはじめ、浄土教は、易行といわれ、阿弥陀仏の本願を信じて一心に念仏をすれば極楽浄土に往生できるという教えです。

鎌倉時代に、後鳥羽上皇から浄土教に対して「念仏停止（ねんぶつちようじ）」の院宣（いんせん）を下されるのは、楽をして儲けるということとを潔しとしない日本人のメンタリティーが影響しているのではないかと私は個人的に思います。

鎌倉時代の院宣である「念仏停止」のきっかけは、令和五年の報恩講でお話しした通り、後鳥羽上皇の女官が許しもなく出家してしまう、承元の法難が原因でした。それに加えて、専修念仏は南都北嶺諸宗から念仏に偏執した教えと見なされており、その教えが広まるとともに、専

修念仏者の中に他宗との軋轢を生む者が出ていたためと言うのが表向き  
の原因だと言われています。

唐で仏教を学んだ空海や最澄は、総合的な仏教を広めようとしていま  
した。最澄は天台、禪、大乘戒、密教も学びました。比叡山の東塔には、  
大乘教の阿弥陀堂もあります。昨年、比叡山に行ったところ、修繕中の  
根本中堂で晨朝法要が営まれていました。そのとき、法華経を称えるの  
かと思いきや、手で印を結び、マントラを称えていました。密教の晨朝  
を興味深く拝見しました。そのとき、暗がりで見ると、なんだか  
子供のころ影絵で遊んでいたことを思い出して、失礼ながら微笑んでし  
ました。

話が脱線したので元に戻すと、比叡山の僧侶は、易行のみに焦点を当  
てた浄土教は、偏りすぎというだけでなく、潔くないと思ったのではな  
いかと思います。簡単にいうと「念仏だけで、そんな簡単に、お浄土に行  
けるわけがないではないか！」と思ったのではないかと思います。

私が得度をしたのは、小学校の時です。京都で得度した夏休み明けに、  
坊主頭で学校に行ったら、皆に「はーげ」と馬鹿にされたのを覚えてい  
ます。それと同様に、坊さんになるにはどんな修業をしたのかと聞かれ  
ました。仏門に入るには、厳しい修行をするのだろうというのが、当時  
の小学生の認識でした。

その時は、浄土真宗は易行であることを、友達に説明できなかったの  
で、お経を読む試験に合格して頭を剃ったということしか話せませんで  
した。

私も、小学生ながら、座禅をしたり、断食をしたりする修行をした方  
が、仏教の坊さんらしいなあと感じていたことも事実で、当時は易行が  
正しいということも確信が持っていませんでした。それは、おそらく、

イソップ物語の影響ではないかと思っています。

### 【仕事を極めること】

話は変わりますが、現代の企業人として、仕事ができる人は、組織力  
を発揮して、大きな仕事ができる人です。

最先端の仕事には、大学などの既成の学問は大して役に立ちません。  
どちらかというと、まずは実行して、細かく軌道修正をして先に進んで  
いくことが要求されます。

目的とする仕事を成し遂げるのは、仕事の量や品質を把握するだけで  
なく、自分の能力の限界を見極め、人材全体の資質を把握し、与えられ  
たりソースだけで業務が達成できなければ、人の能力を伸ばす努力をし  
なければなりません。

そして、組織力を発揮するには、人に任せて、自分だけではできない  
仕事をこなすことが必要です。なおかつ、任せた人には同じ価値観を  
もって、同じ方向の決断を下してもらわなければならない。不安に思っ  
たら、報告してもらうように、意識付けをすることが必要です。

一方で、昔気質の芸人や職人は自分の仕事を教えませんでした。弟子  
に何でも教えてしまうと、親方を超えることができないう発想でし  
た。ですから、弟子は、やっていることを見よう見まねで行い、コツコツ  
努力をして技術を磨いていきました。芸人の場合は、芸を盗めと言われ  
ていました。つまり、沢山先輩の舞台を見て、反応が悪い自分の舞台は  
何が違うか考えることではないかと思えます。コツコツ努力というのは、  
お客さん受けの悪い場数を踏んで、お客様の反応が変わっていくことを  
確かめていくことなのではないかと思えます。

同じように、仕事でプロジェクトを完成させるときに最初からうまくいくことはあまりありません。先ほど言ったように、与えられたリソースをいかにうまく使うかというよりは、いろいろ試行錯誤して、完成に持っていく経験が必要なのかと思います。芸人が滑った舞台を乗り越える経験を沢山することに似て、失敗を乗り越える経験を沢山することが、大きな仕事への一歩なのではないかと思えます。

そういった意味で、簡単に成功する道はないのだと思います。

そして、失敗を乗り越えて仕事が成功した時には、自然と一緒に努力してくれた人や助けてくれた人に感謝するようになると私は思います。

### 【任せるということ】

能力があっても仕事ができない人の特徴は、次のようなところではないでしょうか。

- ① 人に依頼するより自分でやった方が早いと思う
- ② 自分ならうまくできるが、人に任せると失敗するかもしれないと思う
- ③ 結局、自分でやった方が安心と感じる

仮にリスクがあっても、心配であっても、人に任せないと、どんなに優秀な人でも大きな仕事はできません。自分の経験では、他人を信じない自我の強い人と仕事をすると苦労したと記憶します。

職人と芸術家の違いは何かという議論があつて、職人は人に任せることができるが、芸術家は人に任せることができないということを学んだ

ことがあります。

芸術家は、何があつても自分を信じて、他人と共通でない美意識を発揮するのです。他人がどう感じても、自分が良いと思うものを創作、クリエイトするのが芸術家です。ですから、芸術家は人に任せることができませぬ。

反対に職人は分業をして成り立っています。

今回、能登の地震で、輪島塗の漆の工房が大きな被害を受けたと聞きました。漆の工芸は、職人の世界です。

漆器が完成するには、木地師という木を削る人、下塗り、中塗り、仕上げ塗りの四工程があり、更に、蒔絵（まきえ）や螺鈿（らでん）などの行程があります。

蒔絵というのは、漆を塗った上に、更に漆で絵をかくて、その漆が乾かないうちに蒔絵粉という金や銀などの金属粉を振って、絵を描くことです。

螺鈿は、漆だけに使用される技法ではありません。その中で、漆の螺鈿の場合、貝を細かく砕いて絵を作り、その上に漆を塗って、更に、表面を研いで、貝と漆を一体とした模様を浮かだせませぬ。

塗工程は、一人で仕上げることもありますが、多くの場合、すべての行程が、分業で、長年取引のある、技術に信用のある人の間で成り立っています。良い漆作品は、それぞれ工程で技術を磨いた人の連携で出来上がっているそうです。それは、一人で全工程を極めることは、難しいからだと思います。

企業で部下に仕事を任せるには、自分の仕事の流儀や価値観を共有するために教育して、信頼するに足りることを確認することが大切です。

職人が、次の行程を任せる場合は、業務内容と価格だけで任せることはできないのではないだろうか。

そこには、職人やビジネスパートナー間の信頼がないと任せることはできません。

今回の能登地震で輪島塗の漆器で長年培われてきた職人同士の信頼まで壊さないように、ぜひ復興していただきたいものです。

### 【他力に任せる】

それでは、他力に任せるということはどういうことでしょうか。

浄土真宗では、阿弥陀様の本願力すなわち他力にお任せすることです。

真実の信心は「一心」であるとも言われます。一心は、弥陀の本願を疑わず、二心ないことを意味します。これは、阿弥陀仏とその本願を真として信頼していないと、疑いなく一心になることはできないと思います。

ところが、私たちは煩惱を持っています。一心といっても、到達するまで、段階があるのではないかと思います。

大無量寿經に書かれている弥陀の四十八願の中で、あらゆる衆生を救う願として十八、十九、二十の三つの願があります。令和五年の報恩講の歎異抄解説の復習になります。

第十九願では、善行を積んで往生しようとする人が臨終の時に、阿弥陀仏や聖衆が姿を現すというのです。

第二十願は、本願への疑いを持ちながら自力の念仏をする人をも、最終的には往生させたいという願です。

第十八願では、自力の心を捨てて本願他力に帰する念仏をすれば救われると言われます。

第一段階では、浄土に往生したいと願うのですが、その手段として念仏ではなく、道徳的な善行や、座禅や写経、戒律を守ることなど仏教の一般的な教えを選んで実践するのです。これに相当するのが第十九願です。

第二段階では、そうした修行をいろいろ試みても心の安定がなかなか得られず、念仏に注目して、その後はひたすら念仏に打ち込むようになるのです。しかし、その念仏も自分の考え、自力で称えられるものです。これは第二十願に当たります。

第三段階は、自分のはからいを捨てて、阿弥陀仏の要請通りに念仏すればいいのだ、と気づくのです。これが第十八願に相応します。

親鸞聖人は、この三段階を経ること、すなわち第十九願を経て、第二十願から、真実の願である第十八願に転ずることを、「三願転入(さんがんてんにゆう)」という言葉で表されました。このように、自力の念仏でも阿弥陀様はお救いくださいますが、阿弥陀様にお任せして、他力を信じて進んで行けたら良いと思います。

先ほどの、受けない芸人が先輩の芸を見て学ぶ話ではないですが、他力にお任せした信心と思っても雑行を行っていないか自分のことを反省して、先人の教えから学んで信心の有難さを何度も経験すること、もちろん、すぐさま十八願を信じられる境地に到達すれば問題ないのですが、今の自分は、三願転入のどの位置にいるのか反省すること、そうした謙虚さが信心を深めるのではないかと最近感じます。

そして、雑行に道がそれたことや煩惱が生じたことを敏感に感じられ

るようになること、それは、何度も他力にお任せする気持ちを確認することではないかと思えます。信心の道を確認するということ、それは、日々の念仏をすることで正行になっていくか、雑行になっていないか考えて、本願力に気が付くようになれば良いと思っております。

『観無量寿経』散善の上品上生に挙げられた、浄土願生者が具すべき三つの心を七高僧の一人である善導大師は、「三心積」として説明しました。

法蔵菩薩の真実心にならない、徹底して真実心の中に身口意の三業をなせと命令します。実に厳しい規範的命令です。善導は、この積尊の至誠心の勸励を真撃に実行しました。

ところが、善導大師が注釈された三心の中で、至誠心と、深心積における機の深信とは矛盾がありました。善導の至誠心積は「真実であれ」という至誠の要求であるのに対して、機の深信において、自身の罪深さと救いの道が全く閉ざされていることを告白しているのです。

この矛盾を、親鸞聖人は、真実心は衆生の心ではなく、如来の願心となると読み替えました。即ち、衆生が真実心を起こすのではなく、「法蔵菩薩が真実心の中に作った行を須（もち）いなさい」という意味に三心を解釈しました。

私など煩惱のある人間は、善導大師の矛盾と同じことを感じることはありません。虚飾のない念仏が自然に出てくるまでは、第二十願の普段から自力でも何でも念仏を始めていかないと、十八願のはからいを捨てた念仏は自然に出てこないと思っております。

さらに、信賴する人にしか仕事を任せられないように、阿弥陀様にお任せするには、阿弥陀様を信賴し、阿弥陀様の本願を信じて任せることが根本になると思えます。十八願のはからいを捨てた念仏にならないければ、「一心」が「ぶれてしまう」のではないかと思えます。この、「ぶれて

しまう」というのは、まだ、信心が定まっていないということです。

### 【感謝】

プロジェクトなり、チームで取り組んだ仕事が完成した時には、達成感を感じるとともに、一緒に仕事をした人に感謝の念がおのずから湧いてくると思えます。それは、やってよかったという思いが幸せな気分をもたらします。

同じように、生きていくうえで苦しい時に、絶対他力にお任せしたことで、ほっとするような、心休まる気持ちがあれば、阿弥陀様に対する報恩感謝の気持ちも、自然と湧いてくるように思います。

近年は、会社や地域の組織でも、コンプライアンス重視といわれます。コンプライアンスというのは、企業の法令順守を推進することでしたが、今では、いじめやパワハラなどのハラスメントなどを防止するため、インテグリティ、すなわち誠実さを基盤として、法律だけでなく、人権、多様性などを守ることを言います。人権、多様性を守ることは、個を尊重することが求められています。つまり、自分が良いと思う価値観であっても押し付けてはいけないという意味合いもあるので、仕事の上で価値観や判断の方向性を合わせることが難しくなっています。

同じように信教の自由ということで、絶対他力へお任せすることという価値観を、若い世代に共有するアプローチが難しく窮屈になりつつあります。あくどいカルト教団がはびこってきたので、救いを求める方も、信仰に対して警戒感が生まれているようにも思います。さらに、先祖の供養や信心より、仕事や部活動などの日々の生活の方が優先される風潮

があるように思います。

それでも、日常生活の中で、仕事に行き詰まったとき、学業で息苦しくなった時、職場や近所づきあいや部活動の人間関係で困ったとき、こうした時に絶対他力への信心があると、心休まることを伝えていきたいと思えます。息苦しい状況を乗り越えた時には、報恩感謝の気持ちが湧いてくると私は思います。

【おわりに】

仏説阿弥陀経の最後に、「五濁悪世 行此難事 得阿耨多羅三藐三菩提 爲一切世間 説此難信之法 是爲甚難」とあります。

その意味は、「この五濁（時代の穢れ、思想の穢れ、欲望の穢れ、人間そのものの穢れ、寿命の穢れ）の穢れた世界で、この困難を成し遂げ、最高の悟りをついに得てこの信じがたい教えを、人々に説いていることは、困難のことだった」ということで、お釈迦様の考えを述べています。

お釈迦様が弟子の舍利弗に述べたことですので、お釈迦様も、穢れた娑婆世界で、信じがたい最高の悟りを得る教えを説いていることは甚だ難しいと感じているわけで、娑婆の人が簡単に迷いを消すことにはできないのだろうと考えていたと思えます。

だからこそ、弥陀の本願が建てられたと思えます。そして、私たちは弥陀の本願が成就したことを信じ、念仏をして極楽浄土に往生することを願うのです。

阿弥陀様に、私たちはお会いしたこともないし、会話をしたこともありません。『唯信鈔文意』には、「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばず、言葉もたえたり。」とあります。

色も形もない、心も及ばない阿弥陀様を信頼して後生をお任せするのは、十八願の境地に達していなければ、理論的にも、心理的にも、なかなか簡単なことではありません。

私は、本山から教師として浄土真宗の教えを伝えることを許されていますが、一心に信じることについて自分の浅はかな思い込みや勘違いがないか、常に確認しておかないといけないと思っています。言葉で表現すると簡単なことですが、ちよつと油断すると、わかつたふりをして行者のはからいになっているような気持になります。

『歎異抄』の九条に、「念仏まうしさふらへども、踊躍歡喜(ゆやくかんぎ)のこころ、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房(ゆいえんぼう)おなじこころにてありけり。」とあります。

唯円房は自分の中で念仏が喜べないことを感じていることを親鸞聖人に正直に述べているのです。この正直な考え方や態度を、未熟な私は学びたいと思えます。そして、阿弥陀様にお任せすることを不安に思うのも同じで、煩惱があるからだと思えます。

そして、親鸞聖人は、「よくよく案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり。」と、ありがたいことを喜べない煩惱があるからこそ、必ず往生すると説明されます。

まず、こうした煩惱があることを自覚して、親鸞聖人の教えを何度も繰り返し学び、念仏を称えるようにしたいと考えています。自分が信心を得たと思うことこそ、慢心しているようで、恐れ多い気がします。そ

して、日ごろから、聞法したり、他人の姿を参考にしたりして極楽浄土に往生が約束された正定聚の位に近づくよう、迷うことなく進んでいただけたらと思います。

そのためには、日々の念仏が、第二十願の自力の念仏になってしまい、第十八願の正定聚の位へ進むべき道に達していないのではないかと自己反省していききたいと思います。

阿弥陀様に後生をお任せすること、他人を信じて任せること、レベルが違うと思われるかもしれませんが、どちらも、任せる相手を信用しないといけないかと思えます。

本日は、ご清聴いただきありがとうございました。



